



観濤所は、ひたちなか市の東部、磯崎町の海岸沿いの台地上に位置し、(独)放射線医学総合研究所・那珂湊支所の南側の高台に所在しています。眼下には、松林の木々の間から岩に砕ける波しぶきを眺めることができます。

天保4年(1833)年頃、水戸藩第9代藩主徳川斉昭公が平磯町の海を臨む高台の一角を訪れ、聞きしに勝る雄大な景観を賞賛し、藩内随一の波浪の見所として「観濤所」と命名し、自ら書いた文字を掘った碑を建てさせました。

「観濤所」に関しては、次の逸話が残っています。

ある時、水戸藩の彫金家海野美盛が、波に千鳥を彫った鏝うんのびせい(刀剣の柄と刀身の間にはさむ平たい金具)を斉昭公の上覧つばに供しました。すると斉昭公は「このような高い波の形は、想像によるものであろう」といわれ、美盛は「これは実物写生によるもので、この奇観は磯崎坪の清浄石である」旨を答えております。よって斉昭公はこの地へ来て激賞し、「観濤所」の碑をたてたのだそうです。

碑の石材は、安山岩が用いられ、風雨にさらされたままなので風化を防ぐため、昭和10年に平磯町により碑覆堂おおまちけいげつが建てられました。明治期の詩人・随筆家の大町桂月もこの地を訪れ、紀行文「水戸の山水」に「烈公がここを観濤所としたのは、さすがに風景の眼識があった」と高く評価しています。また、明治・大正期の小説家・新聞記者の菊池幽芳きくちゆうほうの小説「乳姉妹ちきょうだい」にも描写されています。

なお、大谷石の碑覆堂は、平成23年3月の東日本大震災により、倒壊してしまいました。昭和46年9月に市指定名勝に指定されています。